

---

# ドッペル源さん

kaji

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ドッペル源さん

### 【Zコード】

N2170G

### 【作者名】

ka.ju

### 【あらすじ】

俺こと源元治によく似た人が目撃されたようになった。俺はそいつが何なのか解明することにした。バトルあります！

(前書き)

楽しんでいただけると幸いです。

## ドッペルゲンガーとは

ドイツ語の「ドッペル（doppel）」は、英語の「ダブル（double）」に該当し、その存在は、自分と瓜二つではあるが、邪悪なものだという意味を含んでいる。

以上の意味から、自分の姿を第二者が違うところで見るまたは、自分で違う自分を見る現象のことである。自ら自分の「ドッペルゲンガー」現象を体験した場合には、「その者の寿命が尽きたる寸前の証」という民間伝承もあり、未確認ながら、数例あつたところで、過去には恐れられていた現象でもある

Wikipediaより引用

<http://ja.wikipedia.org/w/index.php?title=%E3%83%9A%E3%83%AB%E3%82%B2%E3%83%83%82%AC%E3%83%83%BC&amp;oldid=24481427>

俺こと源元春は困っていた。なぜか最近見覚えのない田撃情報を友達などから聞くからだ。

「スーパーでにんじんを真剣に選んでいたのを見たぞ」

「駅でストリートミュージシャンにお金をあげていたところをみたぞ。ブラボーッて言つてた」

「コンビニでウーロン茶にするか麦茶にするか悩んでたのを見たぞ」などといつ田撃情報を最近よく耳にする。俺はそんなところには行ってないし、そんなこともやっていない。

「俺によく似ている人じゃないの？」ほりょく言つじやない。この

「世の中には同じ人間が23人はいるってぞ」

「似ている人っていうかそのもの源さんにしか見えなかつたんだけど、それと同じ人間はそんなにはいないからな」

「どうやらよく似ていてるどころか俺にしか見えないらしい。考えてもどうしようもないでのその時はそのものの俺によく似ていてるやつもいるんだなと訳の分からぬ答えを返してやつた。」

俺には夢遊病もないし、多重人格もない。はず。今の所そんなことは聞いていないからその通りなのだろうと思う。だつたらなんのだろうか。ネットで検索してみたらドッペルゲンガーという用語に引っかかった。自分自身を見る体験らしい、そしてそれを本人が見たら死ぬらしい。俺はその俺自身とかいうやつを見ないように生活しようと思った。目撃情報が在つたところには近づかない。外に出る時はできるだけ俯き加減で歩いた。そうすることでできるだけドッペルゲンガーを見ないようにする努力をした。

ある日俺はいつものように俯き加減に歩いていたら誰かに肩を叩かれた。誰だろうと振り向いたら俺によく似た人だった。

「どちら様ですか？」

思わず俺は聞いてしまつた。それほどてんぱつてしまつたからだ。

「俺か、俺はお前だよ」

しかも、やつは喋りだしたのだ。俺つてこんな喋り方するんだ。

「つて。なんで声かけてくるんだ。お前は！ 俺の努力はどうするんだ。どう責任取つてくれる」

俺はとりあえず逆切れしてみた。

「どうも何も俺は俺だ。俺は俺の思う通りに行動するだけだ」

全く俺俺うるさいやつだ。

「なんで俺に声をかけてきた。俺の今の状態を見たら分かるだろ。俺はお前を見ないように行動してきたのによりにもよつて声をかけてくるだなんてマナー違反じゃないのか？」

論点はずれてきたような気もするがとにかく攻めで行つてみた。

「それは悪かった。なんだかここで声をかけたら面白い気がしたの

でつい声をかけてしまった。悪い悪い」とても悪いとは思つてなさそうだったが、俺はかねてから言おうと思つていつたことを言つた。

「まあそれは今さらどうにもならないからもういい。それよりもお前勝手な行動をするな。お前が好き勝手に行動しているせいで俺はいい迷惑だ。今後目立つた行動を慎むようにしろ。外出すると時はサングラスにマスクを掛ける。いいな」

俺が強めに要求するともう一人の俺はわかつたと黙つてかすかに頷いた。

「悪いが行く所があるのでじゃあな

そう言うともう一人の俺はどこかに走つて消えていった。いつたいなんだつたんだろうか。願うならば一生消えてくれればいいものをと俺はその時神に祈つた。

俺がもう一人の俺に会つた時以来から目撃情報は多発するようになった。俺は死ぬようなことはなかつたがこれには大分弱つていた。

「お前パチンコ屋で働いてたよな」

「元治、寿司屋で寿司握つてたけどお前んちつて寿司屋だっけ？」

「源さんジャイアンツで先発やつてたの見たけどお前つてプロだつたの？」

「源さん国会中継に出てましたけどいつから国會議員になつたんですか？」

「源ちゃんコンビニでいけない本読んでたけどダメだよ」

などと明らかに俺じゃない目撃情報が多発するよになつた。慎むどころか悪化していた。しかしどんな方法を使ってそんなことできるんだ。よく聞いて情報を整理してみると同じ時間帯の話もあつた。これから考えるともう一人の俺はどうやら何人かいるかもしれないと思った。俺はもうこれ以上好き勝手はさせていられないと思い、目撃情報が一番多かつた俺に似ている人がインストラクターをしているという所に向かつた。やつは容易に見つかった。前面ガラスばかりの教室で外から授業風景が見えたからだ。やつはなんだかよくわ

からないホットヨガのよつなのを教えていた。俺はやつが授業を終えるまで建物の影で待ち構えたことにした。

やつはほゞなくして外に出てきた。俺は後ろから声をかけた。

「おーーー 偽者」

やつは「ひひひ」を向いた。やはり俺にそっくりだった。

「……」

やつは喋らなかつた。前のやつとは少し雰囲気が違うよつな気がした。

「お前何がしたいんだ。勝手なことをするなつて言つたじやないか。これ以上勝手なことをするとただじゃおかぬからな。この偽者ー！」俺がそう言つとやつは俺に近づいてきてこう言つた。

「お前が偽者だ。この偽者が」

そう言つとやつは俺を突き飛ばして走つて逃げて行つてしまつた。

「俺が偽者だつて。どうこいつことだ」

俺は軽いショックを受けていた。俺が偽者だとそんなばかなことあるはずがない。

俺は次の日またやつは俺を突き飛ばして走つて逃げて行つてやつは出てくるのを待つていてやつが出てくると俺は後をつけた。やつがどこに住んでいるのか確かめるためだ。

しばらく付いていくとあるビルの中に入つていつた。ドアの前には破れた張り紙が張つてあつた。どうやら倒産した会社の廃ビルらしかつた。中に入ると中は暗くてほとんど何も見えなかつた。頼りになるのは窓から零れ出る口の光だけだつた。窓の方を見ると誰かが立つていていた。おれは一瞬きょとしながら声を掛けてみた。

「おい！ そこにいるのは誰だ」

返事はなかつたがこちらに歩いてくるよつだつた。体格から見て男のようだつた。日の光で見える所まで来るといつが誰だか分かつた。そいつはもう一人の俺だつた。

「待つっていましたよ」

もう一人の俺はそう言つた。

「待つていただって」

「ええ。そうです。ついに入れ替わる時が来たんです。君にはずっとここで暮らしてもうことがあります」

そう言うともう一人の俺はこっちに駆けってきた。敵意を感じた俺はとっさに避けた。

「入れ替わるだってどうしたことだ」

「どうもこうもその通りの意味ですよ」

もう一人の俺はさらに俺に對して攻撃を加えようとしてきた。俺は迎えいれることにした。あいつは俺だ。俺なら大したことがないはずだ。案の定もう一人の俺の拳は避けることができた。俺も拳で応戦したが、俺自身の拳も大したことがなかつたので避けられてしまつた。無益な応戦が繰り広げられ両者共々疲れが見えてきた。

「仕方ありませんね。これを使つことにします」

「何をするつもりだ」

もう一人の俺が手を叩くと床が抜けた。俺は落ちていつた。

「そこであなたはおとなしくしててくださいね」

俺は今時こんなオチ漫画でも使わねえぞと思ひながら意識を失つた。俺は日の光で目が覚めた。どうやらうまくベットの上に落ちたらしい。周りを良く見ると誰かの部屋のよう見えた。ドアがあつたのでそこから出ると廊下に出た。階段を上つたらこのビルの出口が見えた。どうやらさつき落ちたのが地下一階のようなものらしい。

「あらつ。脱出できだぞ」

もうちよつと閉じ込められて壁を叩いたり、不思議な暗号を見つけて、たまたまそこにあつた釘で壁を削つたりなどして脱出したかったのだが俺はあつけなく脱出してしまつた。

俺は学校に行くことにした。もう一人の俺はたぶんそこにいるだろうと思つたからだ。学校に着くとちょうど昼休みになりそうな時間だったので少し待つてから乗り込むことにした。昼休みのチャイムがなつて俺は乗り込むことにした。教室の中を見るともう一人の俺がクラスメイトと楽しそうに談笑していた。

「岡田め。楽しそうに話しゃがつてあれは俺じゃねえつつの。友達なら気付けよな」

そう一人ごとをいいつつ乗り込むことにした。

ガラツ ドン

思いつきりドア開けて入った。ものすゞい音がして、さすがにみんな振り向いた。

「どうした。源さん。ドア壊れちまうぞ。新しい遊びかめがねがトレードマークのクラスメイトが言つた。

「あれつ。源さん。あつちで話してなかつた？」

黒髪の素敵な女子のクラスメイトが言つた。

「うわ。きもつ。源さんが一人いる！？」

一段のり弁を食べていた男子がのりをはがしながら言つた。

「きもいとか言うな！」

俺は思わず突つ込んだがそれどころではない。

「おい！ この偽者。他のやつの目は盗めても俺の友達の目は盗めないぞ。おい、岡田！ そうだろ？」

俺は岡田に振つてやつた。どうこう返答をこいつがしてくるか楽しみであつたからだ。岡田は一瞬びくつとしたが前髪をさらりと搔き分けて言つた。

「ああ。俺には最初からわかつてたさ。こいつが偽者だつていうことに。遅かつたじゃないか。俺はお前が来るまで時間を稼いでやつたんだぞ。よし。お前たち殺りあうんだ」

岡田は自慢の前髪をさらりとたなびかせて言つた。なぜかあいつは俺たちに殺し合いをしろと言つた。それよりもアイツは絶対にもう一人の俺が偽者だということは気付いてないだろうと思つた。

「何で源ちゃんが一人もいるの？ 私はうれしいけど  
幼なじみのますみちゃんが言つた。後半はスルーした。

「それは俺にもわからん。しかし、やつは俺と入れ替わつて今俺の代わりになりますましているんだ。おい！ お前なんとか言えよ」  
ずっと黙っていたもう一人の俺はため息を吐くと俺に向けてこいつ言

つ  
た。

「もう出てきたなんて意外でしたね。もう少し時間を稼げると思ったのですが、ここまで来られたら仕方がない。勝負しましょう。おい。岡田あれを持って」

もう一人の俺は岡田にあれを頼んだようだ。

「あれってなんすか」

岡田はあれが分かつていないようだった。

「あれだ。あれをいいを語じたるが」

「ああ、あれですね。了解しました。」岡田はあわてを帯びて答えた。

岡田におれを捕まえた見ると早速の手を出しつかたが  
「これで勝負だ。これで俺が負けたら素直に消えてやる」

つたらお前は奈落の底で暮らすんだな」「

そう言うともう一人の俺は歩き出していった。俺の意見は聞かないのかよ。仕方なく俺たちは付いていくことにした。

俺たちには体育館で対決することになった。俺は自信に満ち溢れていた。何を隠そう俺は元卓球部だった。マイラケットではないが腕には覚えがあった。

俺たちは卓球で対決することになった。

おしへ  
行くぞ

俺たちは卓球で対決することになった

四〇

カツ

カツ

カツカツカツ

そうかアイツはもう一人の俺。 ということはアイツも俺同様の力を  
持っているはずなんだ。

カツカツカツカツ

「一人とも頑張って」  
源ちゃんは俺たちのどちらも応援していた。一人応援しちゃだめだろ。俺を応援してくれよ。

力ツ力

「おつどいちでもいいや。早く終わってくれ」

落としてやるからな。

緊迫した攻防が永遠と続いていた。実力が均衡していたのでなかなか決着がつかなかつた。最初は見守つていたギャラリーも今は少なくなり、今では一人もいなくなつていた。そして、俺は勝つた。もう一人の俺に勝つたのだ。すなわち今の俺は俺自身を越えたのだ。やつは消えながらこう言つた。

「シェークハンドにすればよかつた……」

それ以来他のドッペルゲンガーの目撃情報もなくなった。どうやらこの前のやつが元のようなものだつたみたいだ。俺の生活に平和が戻つたのであつた。

学校ではこの間の俺対俺の卓球対決が話題になつてゐるようだつた。

「いやー。あん時あいつが一人になつてきもかつたなあ」「あのマジ対決の卓球正直笑えねつて」

「私は源ちゃんが一人いてうれしかったのになあ。なんで消えちゃ  
あのマジ丸の旦那正直笑えれ」で

たんだろ。また戻つて来ないかなあ

廊下や教室でわざわざと噂話が聞こえてきた。俺には変なものを見る目が向けられてきた。

「ねえねえ。また戻つて来るよね。もう一人の源ちゃん。今度はホームラン対決とかどうかな? 源ちゃん野球上手だったでしょ。きっとまた勝てるよ」

ますみちゃんは勝手なことを言つて一人で盛り上がつていた。頼むからもう戻つてこないでくれ。

俺は正直俺の方が消えればよかつたかなと少し思つていた。その後俺がホームラン対決をすることはなかつた。ますみちゃんは残念がつていたけれど。

(後書き)

「拝讀ありがとうございました。今回はドッペルゲンガーについて  
とで投稿させていただきました。コメントなどいただけるとうれし  
いです。ありがとうございました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2170g/>

---

ドッペル源さん

2011年1月5日03時32分発行